

＜書評論文＞

カルチュラル・ スタディーズの挑戦 —ポストモダン社会における ポピュラー文化研究—

Angela McRobbie,
*Postmodernism and Popular
Culture.*
(Routledge, 1994)

鈴木幹子

1 はじめに

1960年代、英国のバーミンガム現代文化研究センターを拠点にして始まったカルチュラル・スタディーズは、その後アメリカを中心にグローバル化し、今や国際的ブームを迎えている。日本においても、1996年に入って『思想』及び『現代思想』でカルチュラル・スタディーズに関する特集が相次いで組まれるなど、研究者たちの関心はますます深まってきたと思われる。しかしながら、カルチュラル・スタディーズとは一体何なのか、いわゆる文化の研究 (studies of culture) とはどう違うのか、その対象領域や方法論はどんなものなのかといった点に関して、わかりにくいといった印象があるのではないだろうか。実は、カルチュラル・スタディーズの独自性は、“こういうものだ”と定義することができないところ、ディシプリン化できない、もしくはされない

ディシプリンとして、その意味や方法を変化させ発展していくことのできる柔軟性にあるのである。それは何故なのか。また、何故そのような新たなアプローチが試みられる必要があるのか。このような問いかけによって、我々は初めてカルチュラル・スタディーズとは何なのかを理解し、その有効性を検証できるのかもしれない。本書はカルチュラル・スタディーズの手引き書というわけではないが、そのような問いにも十分答えてくれるものである。

著者アンジェラ・マクロビーは、イギリスのポピュラー文化、特に若者のサブカルチャーを研究しているが、彼女の研究には一貫してフェミニズムの視点が導入されている。本書は、1985年以降に書かれた彼女の論文（インタビューを含む）を11本おさめた論文集である。論文はそれぞれ独立したものであるが、テーマごとに3つに大別されている。第1部「ポストモダニティとカルチュラル・スタディーズ」（1～4章）では、ポストモダニズムと共に発展してきた様々な思想を批判的に検討しながら、マクロビー自身のカルチュラル・スタディーズの捉え方や方法論を明らかにする。第2部「カルチュラル・セオリーにおける重要人物」（5～7章）では、スーザン・ソントークとヴァルター・ベンヤミンの文化研究を取り上げ、カルチュラル・スタディーズにおけるその業績の意味を問いなおしている。またフェミニストで、ポストコロニアリストのガヤトリ・C・スピヴァックとのインタビューは、カルチュラル・スタディーズの新しい展開を示唆するものである。第3部「若者、メディア、ポストモダニティ」（8～11章）は、今日のポピュラー文化や若者のサブカルチャーを扱うマクロビー自身の研究の成果である。第1部で示された彼女のスタ

ンスが、しっかりとした経験的研究に基づくものであることがここで確認されるだろう。そこで本稿では、第1部と第3部を取り上げることにし、その中からいくつかの論文の内容を説明して本書を概観していくことにする。

2 ポストモダニティとカルチュラル・スタディーズ

カルチュラル・スタディーズの問題意識は、60年代に、イギリスにおける労働者階級の文化を、階級論的分析やエリート文化との二項対立ではなくて、労働者階級自身の文化創造の視点から捉えていこうとするとところから始まったと言われる。そして70年代以降は、人々が日常生活の場においてどのように文化を創造し、その実践を通じていかなる政治的な闘争が行われているのかということをより広く問題にしていくという立場から、若者文化やメディアといったポピュラー（民衆的）文化への関心が深まっていった。

第1章でまずマクロビーは、カルチュラル・スタディーズにおけるポピュラー文化研究にとって、ポストモダニズムの思想が有効であることを指摘する。ポストモダニズムは、従来カルチュラル・スタディーズに影響を与えていた記号論や構造主義の限界を克服し、高級文化とポピュラー文化の区別をなくした。そして、今日の日常生活になじみ深いもの、消費者、読者、視聴者、そして商品といったものを対象として取り込み、それを同じ分析平面に据えて研究することを可能にした。つまりポストモダニズムは、それまでは排除されたり、軽視されてきたポピュラー文化という領域を研究の俎上にのせるのに有効な視点を提供したわけである。

それでは実際に、カルチュラル・スタディー

ズにおけるポピュラー文化研究とはいかなるものなのか。マクロビーは、特にメディア研究を取り上げてそれを明らかにしている。

従来メディア研究では、メディアテクノロジーの発達により、イメージと現実、メディアと社会が互いに深くからまりあって、もはや区別することができなくなっているということ、その結果、メディアが我々の社会生活の構造の中に入り込んで、我々のものの見方や行動までも左右していることが指摘されてきた。例えばボードリヤールは、このような状態を悲観的に論じていた。これに対しマクロビーは、むしろ楽観的である。なぜなら彼女は、新しい意味、新しい文化的表現を作り出す土台を人々に提供するものとしてメディアを考えるからである。ポピュラー文化の主要なモチーフは模倣であるが、人々はメディアを通じてオリジナルなものを取り出し、自分たちの文脈に合うようにそれを模倣し、その結果新たな意味を生産し、やがて主要文化に対抗するような新たな文化を形成するのである。メディアの受け手は、単純な多数者ではない。若者や、黒人、女性、労働者階級といった社会集団やマイノリティは、メディアの飽和に困惑するのではなく、自分たちのためにメディアを能動的に使っているのである。

以上のことから、カルチュラル・スタディーズにおけるポピュラー文化研究では、オーディエンスの多様な意味解釈を発見し、もしそれを戦略と呼んでもよいのなら、彼らが取っている戦略を読み解くことが重視されているということが理解できるだろう。

第2・3章では、カルチュラル・スタディーズそのもののあり方が、諸理論との関係から批判的に考えられていく。このような取り組みは、カルチュラル・スタディーズにとってきわめて重要である。なぜならカルチュラル・

スタディーズは、自らの方法論を持たず、研究対象とそれが置かれている文脈に応じて、過去数十年にわたる知的遺産の総体からその研究方法を引き出してくるものだからである。ここでもまずマクロビーは、ポストモダニズムを取り上げる。文化研究は、近年においてはモダニティへの問へと変容していて、70年代中期から80年代中期にかけて文化分析に重要な概念を与えてきたネオ・マルクス主義は、今やポストモダニズムに取って代わられているからである。

マクロビーは、ポストモダニズムに関わる2つの問題点を指摘する。まず1つめに、ポストモダニズムにおけるフラグメンテーションの扱いに関して。これは、ポストモダニティにおける文化の多様な局面を表すものであるが、例えばジェイムソンは、ラカンの概念を用いてそれを主体性＝主観性の分裂、社会の精神分裂症として捉える。しかしながらマクロビーは、それ以前に完全に統一された主体や社会が存在していたわけではないこと、従って大切なのは、誰が主体の分裂を表現できるのかを問うことであるという。つまりフラグメンテーションを、権力・政治と結びつけて考えることが、カルチュラル・スタディーズの課題としてあげられるのである。

次にネオ・マルクス主義者たちが、その文化分析にポストモダニズムに見いだされる多くのキー概念を利用しているにもかかわらず、ポストモダニズムを批判することで80年代におけるマルクス主義の位置を問うことを避けていることが問題視される。その結果、一見ポストモダニズムから主題は得てはいても、実際にはネオ・マルクス主義の文化分析に非常に近い研究が、再びカルチュラル・スタディーズで行われることになる。つまり、ポストモダニズムがマルクス主義の隠れ蓑になっ

てしまっているのだ。

カルチュラル・スタディーズの語彙の中に、初期のマルクス主義のキーワードがなくなってしまったのは、「文化主義」と「構造主義」という、マルクス主義から派生してきた2つの対立するパラダイムが否定されたからであり、また共産主義社会の失墜によってマルクス主義が現実的に衰退してきたからである。しかしながらマクロビーは、1960年代におけるカルチュラル・スタディーズの政治的問題意識はマルクス主義から得たものであり、その理論的根拠もマルクス主義にあったはずなのに、それが充分議論もされずに放棄されることに懸念を示している。それはネオ・マルクス主義を安易に用いる危険性をはらむ。彼女はネオ・マルクス主義の文化分析の利用によって、粗くメカニカルな下部-上部構造のモデルが復権することや、個々の「生きられた経験」が問われなくなることの危険性を指摘するのだ。1970年代にカルチュラル・スタディーズによって行われた研究は、構造的で、歴史的で、エスノグラフィックなものであった。それは、グラムシのヘゲモニーの理論を利用したものであった。ヘゲモニーとは、支配と被支配の関係が常に一定に反復されるのではなくて、交渉され、対抗され、その結果変更を余儀なくされるものだという視点を開く概念である。マクロビーは、このようなヘゲモニーの概念を用いた文化分析の方法を、改めてカルチュラル・スタディーズにふさわしい方法として見直すのである。(しかしながら第3章においては、ヘゲモニーの概念はなお特権階級に依存しているため、これにリーダーシップの概念を結びつけることが必要であり、より民主的な社会変動の概念が生まれなくては、偶発性の理論も導入されなければならないとしている。)

第3章でも引き続き、マルクス主義の放棄によって、カルチュラル・スタディーズにおける政治的な問題意識が薄れてしまっていること、その結果知識人たちが政治世界の周縁にどんどん押しやられていることが厳しい危機感を持って指摘されている。カルチュラル・スタディーズにおける理論の発展は、政治的緊迫感と結びついてこそはじめて可能になるものであり、従ってカルチュラル・スタディーズは、ポスト・マルクスの時代にあっても、知識人の役割とは何なのか、彼らは誰のために行動するのかといったことを問い続ける必要があるとマクロビーは言う。ここに彼女の研究者としての自覚と強い責任感を見て取ることができるかもしれない。また彼女は、マルクス主義の危機というものを、マルクス主義の正典そのものを脱構築する機会として利用することを提言している。支配的な理論がない今であるからこそ、逆に活発な議論が可能であり、そこからカルチュラル・スタディーズにとって有効な新たな理論・方法が見いだされるだろうというのだ。この章では、偶発性や歴史的に特別な過程を考慮すること、あるいはアイデンティティの形成の実践やそのメカニズムを考慮することなどが指摘されている。

第4章では、多くのフェミニスト達が、自由・解放・平等といったディスコースを生んできたモダニズムを守ろうとして、ポストモダニズムの議論に関わろうとしないことに対するマクロビーの問題意識から、1990年代における新しいフェミニズムの進むべき道が模索されている。カルチュラル・スタディーズの研究者としての、彼女自身の新たな展望としても読むことができるだろう。

モダニティは、混乱、フラグメンテーション、アイデンティティの危機といったものを

経験してきた。そこで発せられたのは、the 'real me' という疑問、本当の私をさがすという問題意識だった。ポストモダニティにおいてもモダニティの経験はあてはまる。しかしマクロビーは、もはやthe 'real me' という問いは、繰り返し問われるべきものではないという。新たに発せられるべき問いとは、
 '私'を我々がどのように定義しているのかということである。マクロビーは、ポストモダニズムにおいては、差異を発見し、それを単純に指摘するだけに留まるのではなく、差異を持って生きるということが一体何を生じるのかということを厳密に考えることが必要なのだという。従って1990年代のフェミニズムの動向は、多元主義に基づく差異の政治であると理解されるべきではない。差異を批判するだけでは、究極的には二元論に帰結してしまうからである。重要なのは、差異が如何に作られ変容していくのかを問うこと、女性であるということが意味することの可能性を広げていくことである。マクロビーは、フェミニズムの強みというのは、ディスコースを作りだし、論争し、ジェンダーの境界線を引き直し、フェミニズム自身の議論についても、常に自ら問いなおすことができるということになければならないとしている。

カルチュラル・スタディーズは、フェミニズムの他にも、ディアスポラ、ニュー・エスニシティ、ポストコロニアリズムなど、様々な差異への問題意識を明確化させてきた。しかしこの流れは、第1章で取り上げられたポピュラー文化研究と全く異なるものではない。差異の政治学としてのカルチュラル・スタディーズにおいても、ポピュラー文化の分析と同様コンテクスチュアルな分析が必要であるということ、マクロビーは繰り返し説いているように思われる。そこで最後に、こういっ

た彼女の研究への取り組みを、実際の彼女のサブカルチャー研究を見ながら確認することにしたい。

3 サブカルチャー、若者文化の研究

イギリスのサブカルチャー研究と言えば、ポール・ウィリスやディック・ヘブディッジの若者文化研究が有名かもしれないが、マクロビーもまたイギリスの若者たちのファッション、特に古着スタイル（セカンド・ハンド・スタイル）に注目して研究を行っている。彼女の研究の興味深い点を、幾つか次に指摘することにする。

古着スタイルは、今日の社会の消費活動にその存在を負っている。今日の消費社会において、使用価値のなくなった商品がどんどん生み出されるわけだが、そのような余剰物資がリサイクルされ、別の消費サイクルにまわされるわけである。ストリートマーケットは、上・中流階級の人々向けに生産された商品にはアクセスすることができない、都市の労働者階級の需要に応えるものである。しかしながら、古着屋に集まった様々な商品を見れば、そこに高級ファッションへの嗜好が見て取れる。品物は、買い手の眼がねにかなうように厳選されているのである。古着の市場は誰でも買い物ができるように値段を設定しているが、そこで得られるものは、単なる衣服ではなくて、スタイルなのである。

しかし、ストリートマーケットは、単なる売買の場としてではなく、集会の場としての社会的な機能も担っていた。この点は、従来のサブカルチャー研究では見過ごされていたことであろう。マクロビーは、古着市場における請負業者の存在を鋭く指摘する。

例えば1960年代までに対抗文化として知られるようになったヒッピーの場合、古着を身につけるそのファッションそのもの、すなわちスタイルが、一つの文化、抵抗の表明として注目されていた。しかし彼らは、自分たちのスタイルを自ら古着の市場で売買していたのであり、そのために古着を自分たちで探し、集め、修繕し、販売するといった一連の請負業を行っていたのである。その結果彼らは、ヒッピービジネスとしてそのネットワークを拡大し、やがてベンチャー企業として成長し、高級ファッションのブティックを開くまでになったのである。つまりサブカルチャーは、将来的な雇用の見込みを保証するものとしての機能も持っているわけである。このようにマクロビーは、サブカルチャーを対抗的アイデンティティの創出の場として一元的に捉えるのではなく、さらにその中で何が起きているのかということを問い続け、それを狭義の文化の領域から解放し、生活する試みとして理解しているわけである。ここに、不断に繰り返される意味生産を読みとっていくとする彼女の視点が現れていると言えるだろう。

さらにマクロビーは、ストリートマーケットは少女たちが進出しやすい場でもあったことを指摘する。少女や女性たちは、若者のサブカルチャーに自分たちのスタイルやドレスのアイテムを提供するだけではなく、これらのアイテムを古着から再発見し、想像力豊かに作りなおしていった、ファッションの中心的な役割を担うようになった。サブカルチャー研究において、フェミニズムの視点を導入し、自らもまた能動的に文化の創出に関わっていく少女や女性の姿を描き出したこと、つまりジェンダーの境界線がどのようにサブカルチャーの中に引かれているのかを問うところ、これはマクロビー独自の方法であり、

非常に評価できると思われる。

1980年代以降、メディアの広がりによってファッションがメディアの中で生まれるようになり、その結果、ファッションはイメージの制限のない流出の場となっている。しかしそのファッションはつねにレトロなもので、やはりそこには、高級ファッションをリサイクルするセカンド・ハンド・スタイルのシステムが存在するわけである。同時に、メディアを通じて高級ファッション界がセカンド・ハンド・スタイルを逆に取り入れていくということが起こっている。その循環は、ますます速くなるばかりだが、そのめまぐるしい変化のなかでは、もはやファッションデザイナーはスタイルを作り出すことができない。現在の消費社会の中では、ファッションの変化は、後でもう一度ファッションシステムの中に書き込むことのできる、買い戻しのきく商品にしっかりと目を光らせている人々、つまり古着市場の若者達の間でしか生まれてこないのである。

ヒッピーに遡るセカンド・ハンド・スタイルは、もちろん対抗文化の表現として考察されることも重要だが、マクロビーは、高級ファッションの余剰商品をうまくリサイクルする過程や、その市場が実は若者たちに雇用の可能性をも供給していることや、男女間での分業のされ方など、若者たちの動きを能動的に捉えながら、セカンド・ハンド・スタイルに読み込まれている様々な意味を明らかにしている。また同時に、経済状態の変化や、メディアの拡大、そして高級ファッションに及ぼした変化といった様々な文脈にも視野を広げている。このようにして、何が起こったのかということが、立体的に我々の前に示されるのである。

最後に1990年代における若者のサブカル

チャーについて簡単に紹介しておく。1990年代においては、エイズの影響が大きく現れてくる。若者たちは、政治的・社会的な問題へのコメントを避けるかのように狂ったように終始踊り続けるレイブ・ダンスに熱中している。そこに見られる男らしさは、従来のように攻撃的ではなくフレンドリーで、エクスタシーが前面に押し出され、一方女性たちのスタイルは、子どものようなイメージを連想させる。これをマクロビーは、性的防衛のメタファーであるとしている。彼女は若い娘を持つ母親としての一面を垣間みせつつも、この深刻な問題に果敢に取り組んでいて共感できる。またレイブ・ダンスのサブカルチャーは、文化的なアイデンティティを持たない若者たちに非常に広範に受け入れられたので、様々な文化から様々な要素を採り入れていること、またやはり新しいビジネスや職業が生み出されるのだが、それは従来の労働の性的分業を再生産するものであることなどが描き出されていく。

以上のような、サブカルチャーを対象とする研究の意義とは一体何であろうか。サブカルチャーは、強い主体性と強い集約的な意味を通して若者たちにアイデンティティを授けていく。またサブカルチャーは自律した場を持っているものであり、そのため他の場における制度的結びつきをどんどん弱めていくことが可能なのである。従ってサブカルチャーの研究を通して、新たな意味・文化が作られていく実践、そしてさらにそれが政治的影響力を獲得していく方法を明らかにしていくことができるのであろう。

4 おわりに

本書は、約10年間にわたるマクロビーの

業績をおさめたものなので、その内容と問題意識は非常に多岐にわたっていて、本稿では取り上げることができなかったものも多い。マクロビーの関心の広さは、そのままインター・ディシプリンのカルチュラル・スタディーズの性格を表すものであると言えるだろう。

マクロビーの研究態度は、省察的で非常に真摯なものを感じさせるのだが、それはカルチュラル・スタディーズが、その研究対象に即して有効な方法論を作り出していくものであるからかもしれない。極端に言えば、常に独自の研究のあり方・方法が生まれてこなければならぬのである。従って何を対象にするのか、それはどのような文脈に位置づけられるものなのかといった明確な問題意識が、まず研究者に求められるだろう。単なる新しいアプローチとして、ブームに終わってしまうようなものであってはならない。

本書でマクロビーは、ポストモダニズムの思想を何度も検討する。ポストモダニズムは、所詮モダニティのデイスコースのなかでめぐっているだけなのかもしれない。しかし彼女は我々はもはや戻ることができないのだという。彼女の視線は、今にそそがれている。意味を創造する、新しい文化を作っていく今を生きている人々に関心が向けられる。そしてその背景には学者としての自覚と、強い政治的関心がある。そのせいか、彼女のポストモダン社会の理解も、肯定的で力強いもののように思える。ひょっとしたら、カルチュラル・スタディーズの活力はそこにあるのかもしれない。

参考文献

- 姜尚中、成田龍一、吉見俊哉、1996、「カルチュラル・スタディーズへの招待」、『現代思想』、第24巻3号、青土社
- Hebdige, Dick, 1979, *Subculture: The Meanig of Style*, New York: Routledge. (山口淑子訳『サブカルチャー——スタイルの意味するもの』未来社、1986年)
- 太田好信、1996、「人類学 / カルチュラルスタディーズポストコロニアルモーメント、あるいは新たな節合の可能性に向けて」、『現代思想』、第24巻3号、青土社

(すずき みきこ・修士課程)